

1. 欠損駆動思考とは

欠損駆動思考 (Kesson-Driven Thinking) は、予想と現実のズレを捨てずに問いとして保持し、創造の起点にする思考の構えです。

この枠組みは、具体的な方法論やテクニックではありません。日常の中で流してしまう違和感——あのもやもやの正体は何か、なぜすぐに手放してしまうのか、持ち続けるには何が必要か——を、4つの概念で説明します。

2. 中核の構造

欠損駆動思考は4つの概念で構成されています。

概念	定義
欠損 (Kesson)	予想と現実のズレを「欠け」として感じた主観的体験
Withhold (問いを手放さずにいること) 2つの信号 (解消と探索の引力)	欠損を反射的に解かず、問いとして保持する機能 「早く解決したい」信号と「もう少し向き合いたい」引力
Container (支えとなる関係性)	Withholdを支える関係性の基盤。内在化された関係を含む

以下、各概念を説明します。

欠損 (Kesson)

予想と現実の誤差を、意識が「欠け」として捉えた主観的経験です。

たとえば、何かを見て「これじゃない」と感じる。説明を聞いて「何か引っかかる」と思う。このとき、頭の中にあった予想と、実際に起きたことの間でズレが生じています。そのズレが「何か足りない」「何か欠けている」という感覚として意識に上ったもの——これが欠損です。

欠損は欠点ではありません。予測のミスでもありません。予想と現実のズレを、自分の感覚として受け取った体験のことです。「自分の予想が間違っていた」と処理してしまうと、欠損は消えてしまいます。ズレを「まだ何か見えていないものがある」と受け取ることが、次に説明する Withhold の前提になります。

Withhold (問いを手放さずにいること)

引っかかりを感じたとき、通常はすぐに答えを出して解消します。「たぶんこうだろう」と結論づける。なんとなく流す。Withhold は、この即座の解消をせずに、欠損を問いとして持ち続けることを

指します。

Withhold は我慢ではありません。答えを出すことを放棄するのでもありません。「この引っかかりにはまだ見えていないものがある」という状態を維持する機能です。

2つの信号（解消と探索の引力）

欠損を感じたとき、2つの信号が同時に発生します。

ひとつは「早く解決したい」という信号です。ズレを検出した身体がざわつき、すぐに答えを出して安定を取り戻そうとします。この信号は強く、速い。

もうひとつは「もう少し向き合いたい」という引力です。まだ何かが見えていない気がする、もう少しこの問いと一緒にいたいという感覚です。この引力は弱く、遅く、最初の信号に飲み込まれやすい。

この2つの信号は、どちらが良いというものではありません。「早く解決したい」信号は、危険の回避や効率的な行動に必要です。「もう少し向き合いたい」引力は、新しいものが生まれる起点になります。Withhold は、この2つの信号の間に立つ構えです。

Container（支えとなる関係性）

答えを出さずに引っかかりを持ち続けることは、ひとりでは非常に難しい。「早く解決したい」信号が強く鳴り続ける中で、Withhold を維持するには支えが必要です。

Container は、その支えとなる関係性の構造を指します。ここで言う「関係性」は、物理的に隣にいる誰かだけを意味しません。心の中に内在化された関係——亡くなった恩師の記憶、幼少期の養育者との体験、かつて「大丈夫だよ」と言ってくれた人の声——も含みます。

内面に信頼できる関係が存在するとき、Withhold は維持されやすくなります。逆に、Container が不在のとき、Withhold は崩壊しやすくなります。「ひとりでは待てない」という構造は、Withhold が個人の意志力ではなく関係性の中で成立する機能であることを意味しています。

ここまでの説明で違和感が残る場合、それはこの枠組みの射程に関わる重要な観点かもしれません。根拠と限界については最後のパートで説明します。

3. なぜすぐに解いてしまうのか

「早く解決したい」信号は、構造的に強い信号です。

この信号は生存に直結しています。危険を感じたらすぐに対処する、不確実な状態を解消して安定を取り戻す——これは生きるために必要な機能です。そのため、この信号は速く、強く、身体全体を動員します。

一方、「もう少し向き合いたい」引力は、弱く遅い信号です。言語化しにくく、緊急性がない。日常生活では、締め切り、効率、「答えを出すこと」への圧力が常にかかっています。この環境の中で、弱い引力は容易に飲み込まれます。

Withhold が潰される条件は、大きく 2 つあります。

第一に、「早く解決したい」信号の圧が強すぎる場合です。強い不安、締め切り、周囲からの「で、どうするの？」という圧——これらは Withhold を維持する余裕を奪います。

第二に、Container が不在の場合です。引っかかりをもち続けることを支えてくれる関係性がなければ、ひとりで Withhold を維持することは困難です。

4. 何の役に立つか

欠損駆動思考が提供するものは、解決策ではなく構造の理解です。

第一に、「今どちらの信号が強いか」を観察できるようになります。引っかかりを感じたとき、自分が「早く解決したい」信号に従っているのか、「もう少し向き合いたい」引力にตอบสนองしているのかを識別できます。この識別自体が、すぐに解消しない余地を作ります。

第二に、Withhold の成立条件が見えるようになります。「なぜ今、引っかかりを手放してしまったのか」を、意志力の不足ではなく構造——信号の強さ、Container の有無——として理解できます。

第三に、Container の重要性が明確になります。引っかかりをもち続ける力は、ひとりで鍛えるものではなく、関係性の中で育つものです。どのような関係が Withhold を支えるかを考える視点が得られます。

5. 根拠と限界

この枠組みの根拠の状態を正直に示します。

確かだと考えていること：欠損駆動思考の 4 つの概念——欠損・Withhold・2 つの信号・Container——は、この枠組みの考案者の探究において一貫して確認されている構造です。これらの概念の定義は現時点で安定しています。

有力だが検証途上のこと：2 つの信号の構造は、複数の学術領域に類似した記述があります。「欠損の保持」と「関係性による支え」の構造的接続は、精神分析や発達心理学の知見と同じ方向を指しているように見えます。ただし、これらの対応についてはさらなる検証が必要です。

まだわかっていないこと：Withhold が成立する条件の全体像はまだ整理の途中です。Container がどのように内在化されるかの詳細な過程についても、さらに精緻化が必要です。この枠組みがどのような場面で有効で、どのような場面では適用が難しいかについても、今後の課題です。